

新型コロナウイルス感染症に関する多発性硬化症患者さんへの助言 (2020年10月23日改訂版)

新型コロナウイルス感染症は SARS-CoV-2 と呼ばれる新型コロナウイルスによって引き起こされる疾患で、肺、気道（鼻、のど、気管）やその他の臓器を傷害します。

以下の助言は多発性硬化症の専門家と多発性硬化症国際連合に所属する研究者により作成されました。内容は新型コロナウイルス感染症が多発性硬化症患者さんにどのような影響を及ぼすかという最近の知見と、専門家の意見を元に作成されています。なお、この助言は新たな知見が集積されるに従って見直され、改訂される予定です。

多発性硬化症患者さんへの全般的な助言

現在分かっている範囲では、多発性硬化症をお持ちであるという事だけで新型コロナウイルスに感染しやすくなる、または重症化や命に関わるリスクが上昇するということはありません。

ただし、以下に当てはまる方は感染した場合に重症化のリスクが上昇します。

- 進行型多発性硬化症の方
- 60歳以上の方
- 男性
- 黒人の方（加えておそらく南アジアの方）
- 身体障害度が高い方（たとえば総合障害度（EDSS）6.0以上の方：総合障害度6.0とは100メートルの距離を歩くのに片手杖が必要な状態）
- 肥満、糖尿病、心疾患、肺疾患をお持ちの方
- 一部の多発性硬化症治療薬を使用中の方（以下参照）

すべての多発性硬化症患者さんは、新型コロナウイルス感染症を予防するために世界保健機構のガイドライン^{*1}に従うことを勧めます。上記の高リスクにあてはまる方は特に注意をお願いします。多発性硬化症国際連合は以下を推奨します。

- 社会的距離の確保のため、他人（特に咳、くしゃみや会話をしている人）とは最低で1.5メートルの距離をとって下さい。これは屋内で特に重要ですが、屋外でも注意しましょう。
- 公共の場ではマスクをしましょう。正しいマスクの使用方法^{*1}にも注意しましょう。

- 混雑した場所（特に屋内）は避けましょう。どうしてもこのような場所に行く必要がある場合にはマスクを着用し、社会的距離の確保に努めましょう。
- 手指を清潔に保ちましょう（石鹸と流水で洗浄、またはアルコールを含む手指消毒薬の使用、消毒は70%アルコールが最も有効とされています）。
- 汚染された（洗う前の）手で目、鼻、口を触らないようにしましょう。
- 咳やくしゃみをする際には、口や鼻を上着の袖やティッシュで被いましょう（咳エチケット）。
- よく触れる物や場所は清潔にし、頻繁に消毒しましょう。
- 適切な受診間隔や方法について主治医とよく相談して下さい。主治医から必要とされた場合はきちっと受診しましょう。
- 心身の健康を保つために可能な限り活動的に過ごしましょう。屋外かつ他人との距離が確保可能な運動や様々な社会活動に参加することを勧めます。
- インフルエンザの予防接種を受けましょう。ご家族にもインフルエンザ予防接種を勧めましょう。

上記の高リスクに当てはまる多発性硬化症患者さんと同居、または頻繁に接する家族や介護者も、患者さんに新型コロナウイルスを感染させないようにこれらにご注意下さい。

多発性硬化症の治療薬に関する助言

多くの多発性硬化症治療薬には免疫の働きを抑える、または調節する作用があります。そのため、一部の治療薬は新型コロナウイルス感染症を重篤化させる可能性があります。治療を中断や延期することで多発性硬化症が悪化してしまう危険もあるため慎重な判断が必要です。

現在多発性硬化症治療薬を使用中の方は治療を継続して下さい（主治医により治療の中止が勧められた場合はこの限りではありません）。

新型コロナウイルス感染症を発症、またはウイルス検査で陽性と判明した方は、治療継続に関して主治医、またはご自身の病状を良く理解している専門家と相談して下さい。

新たに治療を開始する方や、変更を検討している方は、状況に応じてご自身に適した

治療薬を主治医と相談して下さい。その際、以下の点を検討下さい。

- ご自身の多発性硬化症の経過と疾患活動性
- 治療薬固有の効果と副作用
- 新型コロナウイルス感染症に関連するリスク
 - ご自身が上記の高リスクに当てはまるかどうか
 - お住まいの地域の新型コロナウイルスの流行状況
 - ご自身の生活スタイルに伴うリスク（不特定多数の人と接触する職業に就いている、など）
 - 治療薬と新型コロナウイルスに関する最新の情報

個々の治療薬と新型コロナウイルス感染症に関する現在の知見

インターフェロン・ベータ、グラチラマー酢酸塩は新型コロナウイルス感染症に悪影響を及ぼさないと考えられます。インターフェロン・ベータは新型コロナウイルス感染症による入院のリスクを軽減させる可能性が示唆されています。

現在わかっている範囲では、フマル酸ジメチル、テリフルノミド*2、フィンゴリモド、シポニモド、ナタリズマブは新型コロナウイルス感染症重症化のリスクを上昇させないことが示唆されています。

オクレリズマブ*2やリツキシマブ*2といった CD20 を標的とした治療薬は、新型コロナウイルス感染症重症化のリスクを増加させることが示唆されています。ただし、多発性硬化症の病状によってはこれらも治療選択肢に含める必要があります。これら治療薬をお使いの方（オフアツムマブ*2やウブリツキシマブ*2も同効薬です）は上記の注意事項を特に守って下さい。

アレムツズマブ*2、クラドリピン*2の新型コロナウイルス感染症流行期における安全性に関してはさらなる研究が必要です。これらの治療をお使いで、新型コロナウイルス感染症が流行している地域にお住まいの方は、血中のリンパ球数に関して主治医と相談して下さい（リンパ球は白血球の一種で、感染から体を守る働きがあります）。血中のリンパ球数が少ない場合は可能な限り他者との接触を避けて下さい。

新型コロナウイルス感染症の蔓延を理由に以下の治療薬の追加投与を延期すべきかどうかの判断は国により異なります。アレムツズマブ*2、クラドリピン*2、オクレリズマ

ブ*2、リツキシマブ*2。これらの治療を受けている方で、追加投与の時期が近い方は、投与を延期することの利点とリスクを主治医と相談して下さい。主治医と相談なしに治療薬を中止しないでください。

自家造血幹細胞移植*2に関する助言

自家造血幹細胞移植にあたっては強力な化学療法を行うため、免疫機能を一定の期間強力に抑制します。この治療を受けて間もない方は、新型コロナウイルス感染症が蔓延している間は最低でも半年間は他人との接触を避けてください。近日中にこの治療を予定している方は治療を延期することを主治医と相談して下さい。もし、造血幹細胞移植を受ける場合は、他の患者さんとは隔離された病室で化学療法を受ける必要があります。

再発や他の健康問題に対して受診を考える際の助言

多発性硬化症患者さんが再発や、感染症など他の疾患を疑う体調の変化を感じたときには通院中の医療機関に相談して下さい。この際、オンライン診療や電話相談など対面診察以外の対処方法が可能かどうかご相談下さい*3。再発は在宅療養で対処可能な場合もあります。

再発に対するステロイドの使用は多発性硬化症の専門家と相談の上で慎重な判断が必要です。新型コロナウイルス感染症の流行期には、ステロイドの使用は重度の再発に限定することを勧めます。高容量のステロイド治療を受けた後 1 ヶ月以内に新型コロナウイルスに感染した場合は、新型コロナウイルス感染が重症化しやすいことが示唆されています。再発に対してステロイドを使用した場合は感染予防に厳重な注意が必要で、最低 1 ヶ月は他人との接触を避けることを考慮ください。

新型コロナウイルス感染症流行下においても、多発性硬化症患者さんは可能な限りリハビリテーションを継続し、活動的に生活して下さい。感染予防策が充分にとられているリハビリテーション施設の利用や、リモートセッションの活用をご検討下さい。精神的な不調を感じている方は主治医にご相談下さい。

インフルエンザ予防接種に関して

インフルエンザの予防接種は多発性硬化症患者さんにとって安全です。インフルエンザの流行期に差しかかっている国では予防接種を受けることを勧めます。

新型コロナウイルス予防接種に関して

現在開発中の新型コロナウイルス予防接種が多発性硬化症患者さんや治療薬にどのような影響を及ぼすか十分な情報はありません。詳細が分かり次第、今後の改定版に加筆します。

妊娠中の多発性硬化症患者さん、小児の多発性硬化症患者さんへの助言

現時点で、妊娠中の多発性硬化症患者さんに対する特別な助言はありませんが、妊娠中の方における新型コロナウイルス感染症に関する全般的な情報を参照下さい*4。

小児の多発性硬化症患者さんに対する特別な助言はありません。上記の全般的な注意事項をご確認下さい。

*1 本邦では以下の厚生労働省のホームページを参照ください

(https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000164708_00001.html)。

*2 上記の薬剤の内、以下は本邦未承認です。テリフルノミド、オクレリズマブ、リツキシマブ、オフアツムマブ、ウブリツキシマブ、アレムツズマブ、クラドリビン。また本邦では多発性硬化症に自家造血幹細胞移植の保険適用はありません。

*3 現在本邦では慢性疾患の患者さんの定期処方については電話などによる診療によりファックスなどで処方箋をだしてもらうことが可能になっています

(https://www.ajha.or.jp/topics/admininfo/pdf/2020/200228_7.pdf)。ただし、まだ医療機関ごとに対応が異なる場合があるため、通院中の医療機関に問い合わせをお願いします。

*4 本邦においては以下の日本産婦人科感染症学会ウェブサイトが参考になります

(http://jsidog.kenkyukai.jp/information/information_detail.asp?id=101358)。

(上記の内容は、英語の原文を北海道医療センター脳神経内科医長の宮崎雄生先生に翻訳していただいたものです。文末の*1~*4 は原文には含まれていない日本国内の情報です。)